



国宝 赤糸威大鎧(竹虎雀飾)
春日大社

国宝 赤糸威鎧(菊一文字の鎧兜)
青森県 櫛引八幡宮

春日大社 中門 撮影:桑原 英文

基調講演

2

日活ニューフェイスとしてデビューして以来、64年間の俳優生活の中で、時代劇では80を超える役をいただいてきました。桃太郎侍や鞍馬天狗は想像上の人物ですが、歴史上の人物では大名をたくさん演じさせていだいています。最初に鎧を着たのは29歳のとき、NHK大河ドラマ「国盗り物語」の織田信長役です。小道具さんが本物の昔の鎧を持ってきた、そのまま着せられました。昔は私のように身長180センチを超える人間はほとんどいませんので、鎧のサイズが小さいんです。一日着けると声が出なくなるぐらい締め付けられて、重さも50キロほどあるので、

美術品としての鎧のすばらしさ、技術に感動

俳優 高橋 英樹

俳優



80キロの私の体重と合わせると馬がなかなか走らないほどでした。その後、何回か武将を演じるうちに私も出世しまして、2度目に織田信長を演じたときは、私のサイズに合わせたプラスチックの軽い鎧を作ってもらいました。その後も、源義朝、藤原秀衡などたくさんさんの役を演じ、いわゆる戦国ものに出演するたびに鎧を着ています。歴史上の人物を演じるに当たって、色々なことを勉強して役作りをしていくのが大好きです。それがきっかけで歴史好きになりました。この人物はどこで生まれて、どういう育ち方をして、どういう人間になったのか。現地に行つて感じ取ったり歴史家の方にお話をうかがったりします。さらに、この人はどんなお城を作ったのかということにも興味があり、石垣を見て、築かれていたお城を想像するのが大好きです。役で7万人ほど殺していますので(笑)、刀も大好きです。能、狂言、歌舞伎など伝統芸能も大好きです。こういう仕事に携われているのを本当にうれしく思います。また、仕事と共に趣味も増えました。絵も描きます。書も書きます。今81歳ですが、次々と勉強して趣味の世界に生きるということも元氣でいる秘訣だと思います。

プロフィール

日活ニューフェイス5期生として、1961年デビュー。映画黄金時代に「伊豆の踊子」「けんかえれじい」「男の紋章シリーズ」等、たくさんの作品に出演。テレビでは、NHK大河ドラマ「国盗り物語」や「篤姫」、「桃太郎侍」「遠山の金さん」「三匹が斬る!」等、時代劇スターとして多くの代表作に出演。現在、Eテレにて毎週金曜日に放送されている「芸能きわみ堂」では、古典芸能をわかりやすく紹介するMCとして活躍中。またNHK「日本最強の城スペシャル」では大好きなお城を熱く語る歴史好きとしても知られ、2014年には著書「高橋英樹のおもしろ日本史」で野村胡堂文学賞特別賞を受賞。

これまで、鎧を着ることはあっても、しみじみと眺めてすごいと思うたことはありませんでした。今回、大鎧展を見て、美術品としての鎧のすばらしさに感動しています。また、当時の最高の技術を見ると、その一つ一つが、ロケットや新幹線、伝統工芸など、今の日本の技術の根源であると感じます。日本に生まれて良かったと思いますね。さらに、展示されている鎧は、火事や戦があっても当時の形できっちり残ってきました。そうやって大事に残してくれたものを、今、我々が目の前で見る事ができるという平和のありがたさを感じています。

慈しみの古都・奈良

春日大社 学びの会 2025

究極の国宝 大鎧

日時 2025年(令和7年) 7月13日(日) 13:00開演

会場 よみうり大手町ホール(東京都千代田区大手町)

主催 春日大社、読売新聞社

協賛 岩谷産業株式会社、住友電気工業株式会社、ダイキン工業株式会社、NTT西日本株式会社、カナデビア株式会社、関西電力株式会社、株式会社神戸製鋼所、サントリーホールディングス株式会社、株式会社大丸松坂屋百貨店、阪急電鉄株式会社、株式会社松屋、株式会社三菱UFJ銀行、小山株式会社、奈良豊澤酒造株式会社、株式会社明新社

基調講演

1

春日大社 宮司

花山院 弘匡

800年前に作られ、大切に伝えられてきた大鎧

春日大社は、人から人へ伝えられてきた伝世品の国宝・重要文化財を神社界で最も多く所有し、「平安の正倉院」とも言われています。特別展「究極の国宝 大鎧展」では、平安時代から南北朝時代にかけての武士の正式な鎧である大鎧、後年登場する機動性を高めた胴丸の鎧をはじめ、さまざまな所蔵品を展示しています。

春日大社に所蔵されている鎧は、古くは800年前に作られた当時の姿のまま、奇跡的に今に伝えられています。かつて、皇族や将軍といった位の高い人物は、国の安泰や一族の繁栄を願って、その時代の最高の



鎧を神様に奉納していました。豪華絢爛な金属の塊ですから、非常に重たく、人間が着て戦場を歩くために作られたものではありません。素晴らしい鎧は、神様のお道具、ご神宝として奉納され、特別なものとしてみだりに触れられることなく、新品同様の姿のまま大切に何百年も伝えられてきたのです。

その一つが、国宝「赤糸威大鎧(竹虎雀飾)」です。春日大社所蔵の鎌倉時代後期のもので、西の横綱とも言える存在です。兜や袖、裾の部分に、形も表情も全て違う98羽の雀と、めだたいものである竹、百獣の王・獅子があしらわれ、胴の部分には唐獅子牡丹が描かれています。茜染の糸の鮮やかな赤、そして最高の工芸技術で黄金色に輝くその姿は、武士のジュエリーと言っても過言ではありません。

また、東の横綱と言えるのが、青森県の櫛引八幡宮所蔵の国宝「赤糸威鎧(菊一文字の鎧兜)」です。南朝から南部藩に下賜されたもので、菊の花と一文字があしらわれ、同じく唐獅子牡丹が描かれた最高の品です。展示では、この東西の横綱を左右に堂々と並べました。

奈良と青森という離れた場所にある二つの鎧ですが、実はどちらも奈良で作られたものです。平安時代か

プロフィール

昭和37年、佐賀県生まれ。國學院大學卒業後、県立奈良高校教諭等を務め、平成20年4月に春日大社宮司に就任。花山院家は、藤原道長の孫で関白師実の次男、左大臣家忠を祖とし、太政大臣にも就く家で、花山院宮司は第33代当主にあたる。春日大社宮司としては明治以降で11代目。現在、公益社団法人南都楽所会会長、奈良の鹿愛護会名誉会長、帝塚山大学特別客員教授なども務める。

著書『春日大社のすべて』中央公論新社
『神道 千年のいのり 春日大社の心』春秋社

ら江戸時代まで、奈良は鎧の一大生産地でした。作られた鎧は全国に存在しており、今回、600年、700年ぶりに里帰りしているとも言えます。各地に伝わる鎧をはじめ、門外不出の品も含む、国宝・重要文化財の鎧18点が一堂に並ぶ姿は、二度と見ることはできないでしょう。今回の展覧会にあたり、多くの所蔵者の方が出品してくださいました。宝物を大切に伝えてきた春日大社になら、と貴重な品々を快く貸してくださったことに感謝を申し上げます。武士の魂である大鎧、その豪華な究極の美を、皆さんの目でじっくりと見ていただけたらと思います。

究極の国宝 大鎧

俳優

高橋 英樹

春日大社 宮司

花山院 弘匡

幸せの風景——雨の春日大社

花山院 学びの会の開催に当たり、高橋さんには春日大社に来ていただきました。修学旅行以来とのことでしたが、久しぶりに来られていかがでしたか。

高橋 たまたまゲリラ豪雨があって、それがびたつとやんだ後のきれいな山、そこに霞がかかるように雲がスーッと流れて、本当に荘厳な雰囲気でした。山の緑と建物の朱色が何とも言えず鮮やかで。

花山院 この色が春日大社の風景の一番美しい状態だと皆さんおっしゃいます。春日大社が麓にある御蓋山と春日山は、平城京の水源地でした。ですから、そこに雲がかかって雨が降っているというのは、昔の人にとっては大切な水が山から流れてくるという幸せの風景でした。高橋さんが来られたとき雨が降っていたというのは、神様が喜んでおられたのかもしれないですね。

高橋 ありがとうございます。



戦う人のモチベーション大鎧

花山院 高橋さんが武将を演じられたときの写真を見せていただきます。初めて鎧を着たのが織田信長を演じられたときだそうですね。大変凛々しいお顔をされています。鎧が食い込んで痛いというお話をされましたが、そんなことはみじんも感じさせない勇壮さです。続いて、源平合戦の頃の人物、熊谷直実です。大鎧が目立つてくる最初の時代ですね。

高橋 平敦盛という若い侍を殺してしまい、弔うために最後は出家するという人物です。戦いのためには若者も殺さなければならぬという時代ですね。そして次は、2度目の織田信長です。
花山院 馬の上に乗って戦うために、草摺は裾が4枚に分かれた形から、さらに多い枚数に分かれたスカート状になり、機動性が上がってきました。ひげを生やして、こちらも大変凛々しいお顔です。

高橋 自分を強く見せ、幼く思われないようにひげを生やしたそうです。次は伊達政宗ですね。
花山院 この頃になると、大鎧ではなくて、完全にスカート状の裾の胴丸になり、機動性もさらに上がります。兜の大きな飾りは、大將がいることへの安心感を表しているそうです。

高橋 戦う人にとっては、一生懸命戦っていてふと後ろを振り返ったとき、「大將が元気でいるぞ」というのがモチベーションになったようです。だから派手で目立つ鎧を着ていたんですね。

花山院 伊達政宗ですから、本当に片目が見えないようにしておられたんですか。

高橋 そうです。これがつらいんですよ。距離感がつかめない。その状態で馬に乗るのは本当に嫌でした。

花山院 危ないですね。馬に乗る役も多いので、乗馬は常におられるんですか。

高橋 乗馬は習ったことがないんです。日活時代から、落ちればうまくなると言われて、何回も何回も落ちました。伊達政宗のときも2回落ちて、兜が吹っ飛んだこともあります。それでも骨折一つせずに来たので、俳優が生き残るコツは丈夫であることだと思います。

演じていて一番楽しい織田信長

花山院 春日大社では、毎年12月17日に春日若宮おん祭が行われます。平安時代から続くお祭りで、約1000人の行列が町を歩きます。その一部は、豊臣秀吉が奈良を支配したということを示すために始めた軍行列列です。鎧を着て馬に乗る人がいますが、時たま落ちて骨折します。そこはやっぱり専門家と違いますね。高橋さんは織田信長を2度演じられたということですが、どんな印象をもっておられますか。

高橋 演じていて一番楽しいのが信長ですね。喜怒哀楽がはつきりしていて、泣いていたと思ったら突然笑い出す。笑っていたと思ったら急に怒る。それが演じている人間にとっては楽しくてしょうがないです。その方が演じやすいですし、私は信長が一番自分の性格に合っているなと思います。また、世間一般の方が信長に対して抱いて



写真提供：読売新聞社

いるイメージを崩さないようにしています。例の「鳴かぬなら殺してしまえ」のイメージですね。それを絶対に崩さないようにしながら、その中で、どうやってそういう人物になつていったのかを少しずつ演じていく。ガハハと笑いながら、たわけ！と怒り出すような瞬間に、そういう表現を出せると、うまくいったなと思います。逆に、演じていて一番面白くないのは徳川家康です。タヌキ親父と言われるくらい、自分の感情を表に出しませんから。役者にとっては一番難しい役ですね。

花山院 高橋さんにとって、演じているとき鎧を着ているというのはどういう意味合いを持つものでしょうか。

高橋 自分を守ることに加えて、その地域、領地、人々を守るためのものだと感じています。自分が元気でいないと、この国が減滅してしまうというのが大原則ですから。

鎧に込められた誇り

花山院 人々のため、自分のため、その人物にとつての誇りというものが鎧に込められているんです。その誇りが、神様に奉納するときは鎧をさらに華美にし、戦いのときには勝つて平和を取り戻すという願いを込めたものになる。そういった思いを込めた、また、神に奉納された鎧は、日本国民が平和であれという望みにつながります。その究極のものが大鎧だと感じますね。

